



※「来盛」・・・他の地域から盛岡に来ることを地元盛岡では「来盛」という。

南部藩に雄飛した高島商人

今、四百年の時空を越えて

近江商人というと、八幡や日野、五箇荘など湖東の商人を連想しますが、高島から遠く岩手・盛岡にまで出かけて定住した高島商人を見落としてはなりません。江戸時代初期、大溝で商いに従事していた村井新七が、雄飛の志を抱き岩手県遠野に新天地を求めて移り住んだのが、今から四百年前の慶長15年（1610）。それから3年後に盛岡へ移り「近江屋」を開店しました。後にここが盛岡に続いてくる高島商人の「草鞋脱ぎ場」となり、今日に連綿と続く高島商人活躍の原点の地となりました。

高島から盛岡へ出かけた商人は数知れず、南部藩（盛岡藩）の財政を支え、現代につながる盛岡市の発展の礎を築いた高島商人ですが、その活躍ぶりは、意外に知られていません。

今号では、来盛四百年を迎えた高島商人にスポットを当てます。



高島商人の源流

高島地域での商人の発生は中世に遡り、安曇川町南市には五番領城下「立市」で開かれていた市で商いをしていた南市商人がいました。南市商人は、小幡商人らと共に五箇商人団に含まれ、若狭から九里半街道をとり塩魚などを運搬していました。天正元年（1573）、高島郡が織田信長によって平定されたことにより、全ての城館が取り壊され、同時に南市も終焉を迎えます。その後、南市商人は磯野員昌により新庄城下（新旭町）へ強制移住させられますが、天正6年（1578）新庄城主となる信長の甥、織田信澄は大溝に水城を築き、その北と南に城下町をつくり再び南市商人は大溝へ移住します。

現在の勝野には、南市本町や南市中町が残っていますが、町家の一角には田中山勝安寺があり（現在の安曇川町南市には、勝安寺の地名があります）、ここが南市商人の菩提寺であったことが推察されます。史料には、その後の南市商人の経過は明らかではありませんが、前後して村井新七は南部藩に向けて旅立っています。

盛岡城と城下町づくり

盛岡は「みちのくの小京都」と呼ばれます。南部藩27代藩主、南部利直によって40年の歳月をかけて京都に倣ったまちづくりを進めました。主な街道の入り口には、惣門や枳形を設けて人や物資の出入りを取り締まり、後にはその先に同心丁を置いて同心（定軽）に警備をさせました。さながら、盛岡城は全体が「防備都市」であったと伝えられています。

「村井新七」登場

南部氏は、城内に通ずる大手門の正面玄関の真ん前に商人町をつくりました。南部氏が商人を優遇し、特に近江商人たちに京町と名付け一等地を与える英断を図りました。

さて、このような「受け皿づくり」が進む中、高島商人のパイオニア村井新七は慶長15年（1610）、遠野の横田に入ります。そして、その際同行していた2人の弟は、それぞれ遠野と釜石に定住しますが、新七は3年後に盛岡城下に移りました。

ところで、新七の先祖は岸和田城主浅井氏の九男（浅井長政の家臣の子孫とも）で、高島郡村井庄を領

人富則奢
奢則背礼
背則人悪
悪則災来
来則成損
成則家貧
貧則人賤
賤則起欲
起則為罪
為則身亡

「村井市左衛門家家訓」

富を追及するのが商人の道であるが、富むことに依って心をおごるのを第一に戒め、それが破滅につながるという因果関係を説いている。

後に続く小野一族

小野家の先祖は、遠く敏達天皇（第30代）の第四子「春日王子」まで遡り、その末孫である小野妹子は遣隋使として有名ですが、旧志賀町小野に居を構えていたことから小野姓を名乗りました。このほか同家からは小野篁や小野道風を輩出しています。

近年まで、小野総本家は、旧高島町（大溝十四軒町）にありましたが、今は駐車場となり、案内の駒札が往時をしのばせます。

さて、小野家の初代は小野新四郎則秀で、屋号をはじめ糶屋、後に井筒屋と称しました。四男一女があり、長男を直嘉（後の小野善五郎）、次男は権兵衛主元（新七の養子となり、志和近江屋の基礎をつくる）、三男は新右衛門好観（盛岡へ）、四男は

高島商人の進出地

